



Title	占いを思い出す?占いで思い出す? : 日誌法を用いた 占いの中判断の研究
Author(s)	村上, 幸史
Citation	対人社会心理学研究. 2005, 5, p. 77-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

占いを思い出す？ 占いで思い出す？¹⁾

— 日誌法を用いた占いの的中判断の研究 —

村上 幸史(大阪大学大学院人間科学研究科)

運勢に関する占いが読み手に「的中した」と判断される理由について、これまでの実験結果からは、ネガティブな内容の方が「的中した」と判断しやすいという傾向が一貫してみられている。この結果を説明する要因を詳しく探るために、日誌法を用いて検討を行った。研究 1 では占い文章を配布して、生じた事象と「的中した」と判断した内容を記録してもらった。その結果、生じた事象はポジティブなものが多いのに対して、「的中した」と判断された内容はネガティブなものが多かった。また、占いの的中に関して、その内容の想起スタイル(占いを見て想起したか、占いを見ないで想起したか)も同様に測定したが、占いに関する信用度の影響を除いても、占いを見ないで想起し、「的中した」という経験が全体的な中感に影響していた。そのため研究 2 では、一定の期間内に接した占いメディアを記録してもらい、占い利用のスタイルと自発的な想起の重要性について検討を行った。

キーワード: 占い、予感の「的中」、日誌法、事象の想起

問題

女性誌を中心として普及している、文字によって運勢が提示される占い(以下、記述式占い)が読み手に「的中した」と判断される理由について、これまで実験的な検討が行われてきた(e.g., 村上, 1998; 2002; 印刷中; 村上・畦地, 1996)。

その結果、占いを信じる者ほど「的中しそう」とあらかじめ的中の可能性を高く予測し、かつ実際に「的中した」と判断しやすいという自己成就的な構造、及び雑誌の側から提示されている文章にはポジティブな内容が多いのに対して、ネガティブな内容の方が「的中した」と判断しやすいという傾向が一貫してみられた。

この後者の結果を説明する背景として、ネガティブな事象の方が記憶に残りやすいという記憶の非対称性によるバイアスとしての説明が挙げられている。ネガティブな事象と記憶の関係は Taylor(1991)などからも指摘されており、もっともらしい説明ではある。

しかしながら、実際にネガティブな事象の方が多く生じているという可能性はないだろうか。さらに、上に挙げた研究上では、占いの対象期間後に全体的な中判断を求めるという手法が用いられているが、日常生活の中で直感的に「的中した」という判断がなされるのはどのような状況や内容であり、またこの判断は占いの信用と関係があるのだろうか。

以上の点を探るために、本研究では日誌法を用いた検討を試みた。日誌法には参加者にこまめに記録をしてもらうことで、日常生活の中での参加者の判断や行動を追うことができるという利点があり、これまでも欺瞞や説得場面、相互作用などの側面で興味深い結果が示されている(De Paulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein, 1996; 原, 2002; 牧野・田上, 1998; 三宅, 1997; 村井, 1998)。

本研究で参加者に求めるのは、日常生活の中で生じた

自己に関する事象の記録である。日誌法自体も記憶の記録と考えれば、記入や想起などによる内容の歪みを消すことは不可能かもしれない。しかしながら、日誌を元に「占いの的中」を判断してもらうことで、的中判断の時点での想起の歪みを減少させることが可能であると考えられる。また日常生活の中での占いが「的中する」過程を合わせて探るには妥当な方法とも考えられる。

本研究では同時に参加者の占い利用のスタイルとも比較し、占いが「的中する」ことの意味についても検討する。

研究 1

方法

回答者 神戸の女子短大生 51 名²⁾。分析には全てのセッションに参加した 49 名分のデータを用いた。なお、研究は記憶と認知に関する心理学の授業の一環として行われた。

手続き 第 1 セッションでは、参加者に雑誌(女性誌)F の占い文章を配布した。この占いとは、自分の誕生日に応じて参加者は 12 星座のどれかに該当するようになっている、一般には運勢が記述された星座占いと呼ばれるものである。配布した占いが実際のものであることを示すために雑誌名を告げた。その後、「どの程度占いが当たるかの検証をしてもらいたい」という指示を行った。参加者には「この占いが的中すると思う度合い(信用度)」の他に、「占い全般に対する信用度」など一般的な占いに対する態度についても回答してもらった。

また参加者が普段どのように記述式占いを利用しているかについて、どのような時に占いを見ているか(見るスタイル)、及び占いを見る動機について自由記述を求めた。

続いて日誌を記録するための冊子を配布した。この冊子にはあらかじめ 1 ページごとに配布した占いの対象期間内の日付が印刷してある。また、各ページには一日に生じ

Table 1 占いの中に関する想起スタイルの分類

A. 事象の生起→占いの想起
事象が生起した後で、占い(を見ずに)内容が想起される場合
B. 占いの確認→事象の想起
占いを読みながら、先に生起した事象を想起した場合
C. 占いの想起→事象の想起
占いの内容を想起して、同時に先に生起した事象も想起される場合

た事象、それに対する評価、及び占いが「的中した」と判断したことを記録する箇所を設けた。記述されたそれぞれの事象については、参加者自身に「良かった」「悪かった」「ツイていた」「ツイていなかった」という4箇所の欄に○を付けることで、自己評価をしてもらった(複数回答)。

配布した占いに関する的中の記録については、その具体的な内容と、的中と判断した際の想起スタイル³⁾を記入してもらった(Table 1 参照)。また日誌の記入については、1.できるだけメモを取ること、2.少なくとも一日の終わりにはその日の内容を記録すること、3.配布した占いの内容を記憶する必要はないことを教示した。配布した占いは回収しなかった。

2週間後に行われた第2セッションでは、第1セッションと同じ占いを再度配布し、まず提示した占いが全体としての的中していたかどうかを判断してもらった(5段階で値が大きいほど「的中した」と判断したことを示す。以下「占いの的中度合い」)。その際に、参加者自身が記録した日誌を元に判断するように教示した。その後、「的中した」と思う占い文章の箇所に線を引き、的中判断の背景となる具体的な事象内容を記入してもらった。他に「該当週の運勢」のよしあし(5段階、高いほどポジティブ)や、占い文章の中で意識していた箇所や参加者自身に頻繁に生じることにしても、占い文章の該当する箇所に線を引いてもらった。

なお村上(2002)と同様に、雑誌の占い文章(2週間分、12星座全て)については、あらかじめ筆者を含めた3名が記述及び星座ごとにポジティブ・ネガティブの方向性の程度も評定した(7段階、以下「ポジ・ネガ評価」)。占い文章の総記述数は177、評定者間の「ポジ・ネガ評価」についての相関は $r = .86 \sim .88$ である(平均値は3.98、高いほどポジティブ、 $SD = 1.03$ 。各星座単位での「ポジ・ネガ評価」の平均値(「星座別の運勢」、7段階で高いほどポジティブ)は3.08~5.12)。

結果及び考察

日誌に記録された内容 日誌に記録された事象は合計で1612(平均32.9/名)記述であった。まずこれらの内容について、自己評価を元に「良かった」及び「ツイていた」と判断された記述をポジティブ事象、「悪かった」「ツイていなかった」と判断された記述をネガティブ事象、残りはア

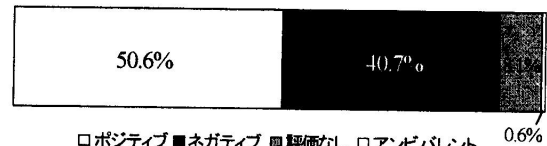


Figure 1 日誌に記録された事象の分類

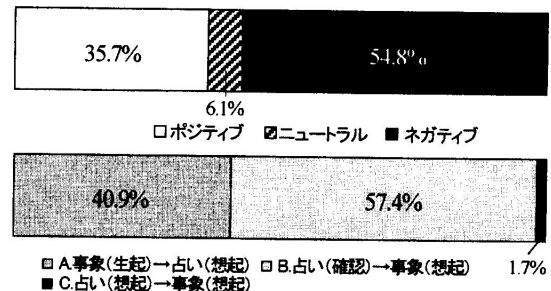


Figure 2 的中と判断された占い記述とその想起スタイル

ンビバレントな事象(ポジティブ/ネガティブ両方の側面を含むもの)、評価がないものの4タイプに分類した。

その結果、ポジティブ事象の方がネガティブ事象よりも多く記述されていることが分かった(Figure 1)。また個人単位でみた場合には27名(55%)がポジティブ事象の方を多く記録していた。このことは記録された内容に限定されるが、日常生活で生じる経験の量自体はポジティブ事象が多いことを示す結果と考えられる。

また事象の内容については、村上(2003)を元にカテゴリー分類を行ったところ、ポジティブ事象では「友人とのつきあい」(132例)・「望みが叶った」(99例)・「援助をもらった」(86例)・「知り合いと接触する機会があった」(67例)、ネガティブ事象では「ミスをした」(115例)・「体調が悪い」(72例)・「天気が悪かった」(50例)というカテゴリーに含まれる事象が多く記述されていた(ここには50例以上みられたカテゴリーのみ記述した)。

「占いの的中」に関する想起スタイル さらに日誌に記録された、配布した占いが「的中した」と判断された場合の想起スタイルと内容について分析を行った。「的中した」と判断されたのはのべ115回(平均2.35回/名)であり、37名が配布した「占いの的中」を記録していた。

まず記述の「ポジ・ネガ評価」に基づいて分類を行ったところ、ネガティブな占いの記述に関する中記録数の方が多かった(Figure 2)。また想起スタイルとしては占いを読んでから該当する事象を想起し、「的中した」と感じたものの(Table 1のB)が多かった。数例しかみられなかったCのスタイルによる的中判断を除けば、A・Bどちらの想起スタイルでもネガティブ記述の方が多く、占いを読みながらネガティブ事象を想起した頻度が最も高かった(のべ38事例、33.0%)。この想起数はTable 2に示した。

想起した時期にはスタイルによる偏りはみられなかったが、占いをみずに内容を想起して「的中した」と判断された

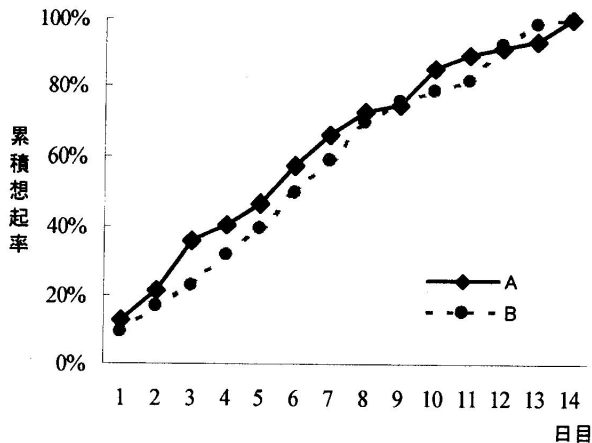


Figure 3 「占いの的中」と時期(想起スタイル別)

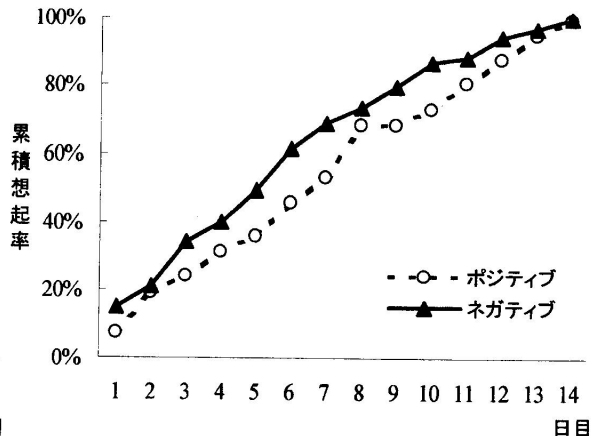


Figure 4 「占いの的中」と時期(内容の方向性別)

Table 2 想起スタイルと内容の方向性別的中数

	ポジティブ	ネガティブ	ニュートラル	計
A	18 (38.3%)	27 (57.4%)	2 (4.3%)	47
B	23 (34.8%)	38 (57.6%)	5 (7.6%)	66
C		2 (100.0%)		2
計	41 (35.7%)	67 (58.3%)	7 (6.1%)	115

カッコ内は各スタイル総数に対する割合を示す

Aのスタイルはやや前半に多かった(Figure 3)。

記録内容では、占いの対象期間(2週間)中で、ネガティブ記述に関する「占いの的中」の約7割は対象期間の前半にみられた(前半69%/後半31%)のに対して、ポジティブ記述に関する「占いの的中」は前後半ほぼ均等に(前半53%/後半47%)みられた(Figure 4)⁴。

また記述の「ポジネガ評価」と想起スタイルを組み合わせると、ポジティブかつBスタイルの記録は45.8%と前半部分でやや少ない(他は60%以上)ことが分かった。想起した占いの内容の特徴としては、同じ記述が複数回想起されている点が挙げられる。

また「占いの的中」として判断された記述は村上(印刷中)の分類では、「断定的運勢」のカテゴリーに相当するものが多く(87.8%)、この点は共通していた。

的中した内容と想起スタイルの関係について5事例以上観察されたものをみると、「対人的な接触」と「金銭的な満足感」は占いをみずに想起しやすく、逆に「対人関係」や「恋愛関係」のよしあしや「ミスをしたこと」は占いを読んでから該当する事象を想起した場合が多かった。また信用度高群は「対人関係」や「恋愛関係」のよしあしについて、特に「占いの的中」を記録した者が多いことが分かった。

以上の結果は、占いから提示される内容が、「対人運」や「恋愛運」という内容が多くを占めており(村上(1998)では女性誌の多くの占いで「恋愛運」として提示されている文章がみられた)、読み手に重視されている点が反映されていると考えられる。

日誌の内容と的中判断の関係 参加者が第2セッションで行った、占いの全体的な中判断について分析を行った。

まず全体的な傾向について、村上(印刷中)では、本研究で用いたのと同じ雑誌の占いをし、類似した参加者を用いている。これと比較すると、「占いの的中度合い」は同程度(2.90→2.81)であり、「的中した」と思う占い文章の箇所に引かれたラインの本数は増加していた(1.79本→2.23本)。このことは日誌を見ながら判断した場合でも、全体的な「占いの的中度合い」は低下しないことを示していると考えられる。

なおラインを引いてもらった中箇所はネガティブ記述が最も多く(51.9%)、ネガティブな内容が「的中しやすい」点はこれまでの研究と一貫していた。また予測として「的中すると思う度合い」の平均値は2.94であったことから、「占いの的中度合い」の値(2.81)とは単純に比較はできないが、予測ほどは「的中しない」という結果も同様であった。

続いて、参加者が記録した日誌の内容と、全体的な「占いの的中度合い」との関連性を検討した。的中判断の際には「該当週の運勢」のよしあしについても評定してもらっている(平均2.88)。この「該当週の運勢」について、配布した占いの方向性がネガティブだった群の方が、「該当週の運勢」をネガティブと判断しているという有意な傾向がみられた($t(44) = 2.01, p < .05$; ポジティブ: 3.15 > ネガティブ: 2.60)。

そこで日誌に記録された事象について、個人の記録内で事象の占める割合をポジティブ事象とネガティブ事象に分けて求めたところ、ポジティブ事象の割合が高くなるほど「該当週の運勢」をポジティブと判断する傾向がみられた($r = .49, p < .01$, ネガティブ事象とは $r = -.30, p < .05$)。しかしながら、これらは「占いの的中度合い」とは無関係であった(ポジティブ事象: $r = -.02$, ネガティブ事象: $r = .19$ 、

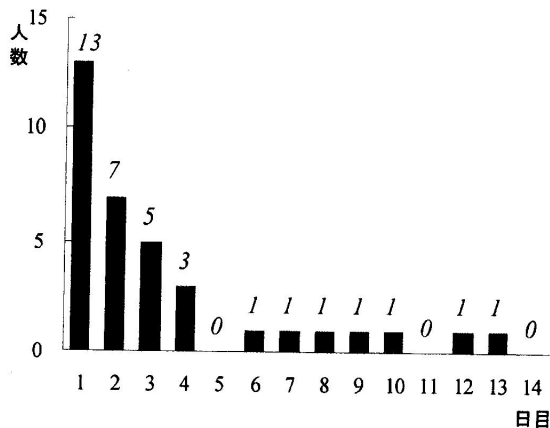


Figure 5 初めに「的中した」と感じた日

ともに ns 。

以上の結果は、特定の期間の全体的な印象である、ポジティブ・ネガティブという方向性は日誌を元にして判断されていたとしても、その方向性は直接的な判断に影響を与えている訳ではないことを示す結果であると考えられる。

一方、日誌に「占いの的中」を記録した回数は第 2 セッションの全体としての「占いの的中度合い」と相関がみられ ($r = .46, p < .01$)、中でもネガティブ記述の的中 ($r = .51, p < .01$) や、事象が生じた後で占いを想起したというスタイル (Table 1 の A; $r = .40, p < .01$) と関連性が高かった。また記録された的中数は信用度と関連していた ($r = .39, p < .01$)、信用度を統制した偏相関係数を算出しても「占いの的中度合い」との関連性は高かった ($r = .39, p < .01$)。このことから信用度に関係なく、直感的な「占いの的中」が全体的な判断の根拠になっていると考えられる。

信用度の影響について述べれば、平均点によって高群低群に分けた場合に、記録された事象には違いがみられなかったのに対して、日誌に記録された「占いの的中」については信用高群はポジティブな「占いの的中」が多く ($t(23.7) = 2.42, p < .05$; 高群: 1.43 回 > 低群: 0.36 回)、また占いをしながら想起したというスタイル (Table 1 の B) が多く記録されていた ($t(29.4) = 1.86, p < .10$; 高群: 1.95 回 > 低群: 1.00 回)。このことは占いへの興味と好意的な解釈がポジティブな側面に表れやすく、結果として「占いの的中」を増加させることを示唆する結果と考えられる。

さらに「占いの的中」を記録した者について、その記録数を時期の偏りによって、前半中心群 (3.48)・後半中心群 (2.70)・イブニング群 (2.67) と分けると (カッコ内は信用度)、前半中心群が 37 名中 21 名と圧倒的に多く、もともと占いの信用度が高い者が集まっていた。

前半中心群とそれ以外の群に分けると、事象が生じた後で占いをせずに想起したというスタイル (Table 1 の A) が多かった ($t(35) = 2.37, p < .05$; 前半中心群: 1.57 回 >

Table 3 占いを見る動機とスタイル記述の分類

	状態	事象の前後	動機	スタイル
重大な事象の前		前	18	10
運勢を知りたい		前	4	0
悪いことが起こったとき	ネガティブ	後	7	0
不安状態				
自信がないとき	ネガティブ		10	1
恋愛			2	3
気分が良いとき	ポジティブ		1	0
時間単位			3	3
他人のすすめ			2	1
見かけたら／時間があるとき			19	84
占いが当たってたら			1	0

それ以外: 0.63 回)。このことから、占いを信用する者は、占いを提示されてから早い段階で直感的な「占いの的中」を経験しているといえるだろう。なお「占いの的中」が初めに記録された日について Figure 5 に示したが、その 8 割以上が日誌を付け始めてから 4 日目以内であった。

信用と手がかり 占いで「的中する」内容は、どの程度あらかじめの中での予感を喚起する内容と言えるだろうか。そのため第 2 セッションで測定した占い文章の内容に目を向けると、参加者は平均 2.00 箇所 ($SD = 2.05$) への意識が高く、平均 0.82 箇所 ($SD = 1.24$) が頻繁に生じることであったと回答していた。この内容の特徴として、意識していた内容と頻繁に生じることの両者ともにネガティブな事柄が多くを占めていたことが挙げられる (意識: ネガティブ = 52 例 vs ポジティブ = 24 例; 頻繁: ネガティブ = 25 例 vs ポジティブ = 2 例)。

信用度との関係を見ると、信用度が高いほど、もともと意識していた箇所が多いことが示された ($r = .32, p < .05$)。これと比較すれば、信用度が高いほど、参加者自身に頻繁に生じることが書いてあるという関係は強くみられなかった ($r = .28, p < .10$)。

このような内容が、実際にどの程度「的中した」と判断されたかをみてみれば、意識していた箇所が平均 0.67 箇所 ($SD = 1.31$)、頻繁に生じることについては平均 0.47 箇所 ($SD = .79$) であった。割合に直せば、意識していた箇所の 57%、及び頻繁に生じると考えていることの 33% が「的中した」と判断されていたことになる。

この的中数は信用度とは無関係であったが、全体としての「占いの的中度合い」とは相関がみられた (意識: $r = .39, p < .01$; 頻繁: $r = .33, p < .05$)。ただし、両者が全く重ならないと仮定しても、約半数はいわば「予想外の的中」に該当すると言えるだろう。

以上からは、運勢に関する占い文章には多くの者に該当することが書いてあるというよりも、むしろ占いを信用することで記述内容への意識が高まったり、もともと信用する者が意識しやすい内容が占い文章に書かれているとも言える。これらは「予感」としての手がかりに用いられている可能性がある。ただし、手がかりの数が「的中した」と判断

する可能性を高めている訳ではないといえる。

占いを利用するタイミング 日常生活で占いをどのように利用しているのかについて、占いを見る動機及び、占いを見るスタイルに関する記述を分類したところ、「重要な事象の前」・「運勢を知りたい」・「悪いことが起こった時」・「不安状態」・「気分がいい時」・「時間単位」・「時間がある時」・「占いが当たってたら」というカテゴリーが得られた(Table 3)。中でも、ネガティブな状態にあるとき、及び事象が起こる前に占いを積極的に利用していることが分かった。

研究2

研究1では、村上(2002)にならって、市販の雑誌占いをあらかじめ配布し、的中判断を行ってもらった。しかしながら、占いを利用するタイミングの結果から考えると、同じ占いを繰り返し見ることは稀のようである。そのため、直感的な的中判断を探ることができたとはいえない。

そこで研究2では、記録者の日常生活においてテレビや雑誌などの占いメディアに接した際に日誌を記録してもらい、参加者の利用スタイルを探ると共に、その傾向を研究1と比較した。

方法

参加者 神戸の女子短大生20名。分析には全てのセッションに参加した13名分のデータを用いた。なお、研究1と同様に、記憶と認知に関する心理学の授業の一環として行われた。研究1と両方に参加した者はいなかった。

手続き 研究1と同様に日誌を記録するための冊子を配布した。この冊子には同様にあらかじめ1ページごとに配布した占いの対象期間内の日付が印刷してあり、各ページには、接した占いメディア、提示された占い記述の内容、及びその占いを見た状況(あるいは見ようとした動機)、その占いが「的中する」かどうかの予測(7段階)、及び占いが「的中した」と判断した際に記録する箇所を設けた。また配布した占いに関する的中の記録については、研究1と同様にその具体的な内容と想起スタイル(Table 1 参照)を記入してもらった。

日誌の記入方法については、基本的に研究1に準じるが、占いを見る必要はなく、見た際に記録すること、及び占いの内容を記憶する必要はないことを同時に教示した。

1週間後に行われた第2セッションでは、占いが全体としての的中していたかどうかなどを、参加者自身が記録した日誌を元に判断するように教示した。この点は複数の占い全般に関する印象に相当するため、本研究の目的からは外れており、詳細は省略する。

結果及び考察

利用されている占いメディア 日誌に記録された占いに接した総数はのべ99回(平均7.08回/名)であった。中

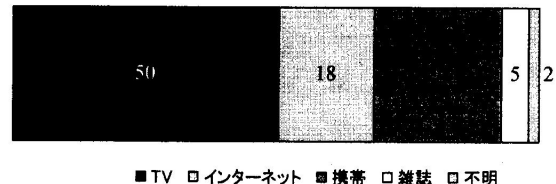


Figure 6 日誌に記録された占いメディア(のべ回数)

でも参加者が一週間に接した占いメディアの割合をFigure 6に示した。もともと利用されていたのはテレビの占いであった。

「テレビを見てたら」(22件)や「いつも見ている」(18件)という状況に関する記述からは、積極的に見ようという動機よりも、むしろ占いに習慣的に接している姿がうかがわれる。実際に、参加者には朝起きて必ず特定のテレビを見る習慣があることを指摘していた者がいた。村上(1998)でも、参加者の3分の2が特に注目している占い(「注視占い」)を持っていたが、積極的に情報を得ようとするのではなく、運勢やアドバイスが提示されているという受動的な占利用は注目すべき点であろう。

日誌に「的中した」と記録されたのは、のべ25回(平均1.79回/名)であり、10名が「占いの的中」を記録していた。この結果から判断すると全体の的中率は25.3%であり、最も回答が多かったテレビから提示される占いの的中率は24.0%で、大きな差はみられなかった。

村上(1998)は、占いメディアに対する全体的な印象(的中可能性)を尋ねているが、テレビに対する印象は好意的だった。テレビの占いかからは一日単位の運勢が提示されており、一度に提示される情報量が小さいという特徴がある。この情報量の小ささは、的中率の低下につながりやすいと考えられる。しかし、テレビの占いが高く評価される理由として、ポジティブーネガティブという運勢の方向性が星座によって順位付けされるという工夫がなされており、運勢の方向性を強く意識させている点が挙げられる。また、占いの対象期間が短いという点からも、読み手の生活スタイルに合致しているという点もあるだろう。

研究1と比較すると、「的中した」と判断された際の想起スタイルは事象が生じた後で占いを見ずに想起したというスタイル(Table 1のA)の割合が少し増えていた(25事例中12事例(48.0%)、研究1では40.9%)。これはテレビやインターネットのようなその場限りのメディアが多数を占めていた点が理由として考えられる。

占いの的中と予測の効果 日誌には、提示された占いにそれぞれについて、的中の予測も記録してもらった。その予測の程度と、Table 1に挙げた想起スタイルとの関係をFigure 7に示した。

この結果からは、予測の高低と想起スタイルには差がないこと、及び予測が元々高かったものが多く「的中した」と

判断されていることが分かる。村上(印刷中)でも予測ほどは「的中しない」が、予測が的中することは占い全体を高く評価することにつながっていた。

このことは、人は予測が可能であるということを示すのではなく、予測の際に何らかの「予感」となるものを持ち、それが的中と結び付けられる可能性を示唆していると考えられる。もちろん、これが「気まずい思い」や「ホッとひと息つける」などの感情を喚起する語句(村上, 印刷中)や、「水難」のようなレトリックや倫理的な内容(鈴木, 2004; 板橋, 2004)などの提示する占い文章の側にあるのか、あるいは想起の際の状況や読み手が持つ傾向(研究 1 で示したような意識の高まりや頻繁に生起する事象)などにあるのかは、この結果だけでは判断できない。しかしながら、予測を行い内容を位置づけることで、内容に関する注目感が挙がり、想起する可能性が高まる可能性はあるだろう⁹⁾。

「予感」となるものの例を挙げれば、第 2 セッションではネガティブな占いの提示に対して、「悪いことに気を遣っていた」という記述が 3 件ほどみられた。これは占いに従うことでもあるが、同時に何かネガティブなことが実際に生じた場合には、当初持っていた気遣いの意識は事象と結びつけられて予感となる。

また「あらかじめ予定があったが、(占いから)嫌な予感がしていた(そしてそれが的中した)。」「という記述もみられた。この参加者にとって予定はある種の運命感に相当するものであり、予定をこなすという義務感が的中意識を高めていると言える。このように突発的な事象ではなく、あらかじめ予定してあったことなども予感となるだろう。

このような手がかりが「予感」として想起される可能性を高めているとすれば、ネガティブな占いの方が「的中する」説明の一つになるだろう¹⁰⁾。

論議

本研究の結果では、日常生活ではポジティブ事象の方が多く生起しており、占いで提示されているのもポジティブな内容であった。これに対して「的中した」占いとして記録されたのはネガティブな内容が多いことが示された。この傾向がネガティブな占いが「的中しやすい」という全体的な的中判断にも影響していると言える。

この結果は、運勢占いに関するこれまでの結果と共通していることから、占いにに関する的中判断の特質行動と考えられ、これが日誌を見てもネガティブな内容が「的中しやすい」、的中率も低下しないという傾向に結びついていると考えられる。もちろん記録の偏りや占い文章を暗記している可能性、必要以上に占いを意識している点などは考慮すべき点であるが、実際に「占いの的中」は度々生じていた。特に自発的に占いが想起されるスタイルは一般的な利用形態に近いと考えられ、このような「占いの的中」は占

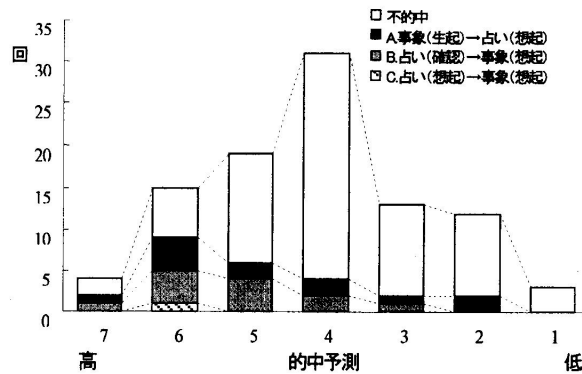


Figure 7 日誌に記録された的中の予測的中スタイル

いを見なければ生起した事象も想起されない状況と比べて、主観的な中感覚は高いのではないかと考えられる。

もともと占いの利用としては、事象が生起する前に比重が置かれていたことから、「見る楽しみ」と「的中することの楽しみ」を分離して捉える必要があると考えられる。「的中した」かどうかを確認するという利用は一般的ではないが、事象が生起することで占いが想起されるスタイルは、これと反するものではない。

占いを読んでから該当する事象を想起することは、手がかり再生として容易であると考えられることから、手がかりのない自発的な想起は「直感的な中」として価値が高いのではないかと考えられる。そして、その想起に対して、信用度が好意的な解釈を導く役割を果たしていると考えられる。占い内容を想起することと的中判断を区別して考えれば、直感的に「的中している」と判断されやすくなる要素、例えば信用度から生じる意識の高さなどがこれに相当する。また、文章内容や提示方法などの占いの側にある要因も含めて、占いの想起しやすさについても検討する必要があるだろう。

最後に、ネガティブな状態で占いを利用することは、ポジティブな内容を見ることで安心感を得たり、ネガティブな結果を運勢という理由に帰属させる役割があると考えられる。そのため「的中することの意味が連想や想起の仕方にあるとすれば、ネガティブな記述が「的中すること自体は必ずしもネガティブではないかもしれない」。

引用文献

- De Paulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. 1996 Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 979-995.
- 原奈津子 2002 説得状況による送り手認知過程の差異 日本社会心理学会第 43 回大会論文集, 232-233.
- 板橋作美 2004 占いの謎—いまも流行るそのわけ 文春新書
- 牧野由美子・田上不二夫 1998 主観的幸福感と社会的相互作用の関係 教育心理学研究, 46, 52-57.
- 三宅封建 1997 社会的相互作用記録作成の試み: 社会的

- 相互作用、孤独感、マキャベリズム 日本社会心理学会第 38 回大会論文集, 124-125.
- 村井潤一郎 1998 青年の日常生活における欺瞞 日本社会心理学会第 39 回大会論文集, 136-137.
- 村上幸史 1998 ツキの流れは占いで読む!? 運に関する信念における占いの情報的影響 日本社会心理学会第 39 回大会論文集, 232-233.
- 村上幸史 2002 断定、仮定、命令?! — 占い文章と運命観・運勢観 — 日本社会心理学会第 43 回大会論文集, 596-597.
- 村上幸史 2003 「幸運」及び「不運」の持続性を探る 対人社会心理学研究, 3, 47-54.
- 村上幸史 印刷中 占いの予言が「的中する」とき
- 村上幸史・畦地真太郎 1996 信じる、行動する、だから当たる 日本社会心理学会第 37 回大会論文集, 178-179.
- 鈴木淳史 2004 占いの力 洋泉社新書
- Taylor, S. E. 1991 Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*, 110, 67-85.

註

- 1)本研究の一部は第 45 回日本社会心理学会大会で発表された。占い記述の分類に協力をお願いした笠木理史・木村昌紀両氏に感謝する。
- 2)対象者は女子短大生の 1、2 回生であるため、年齢は 18 歳から 20 歳が大半を占めている。しかしながら、回収の際に記入される内容がプライベートな事象であることを考慮して、年齢などの個人情報記入を求めなかった。セッション間の質問紙の照合は、第 1 セッションで配布した質問紙に記入し

た番号で行った。以上の点は研究 2 も同じである。

3)この想起スタイルは、占いを見て内容を想起する(同時に「的中」も経験する)か、占いを見ないで内容を想起するかに大きく分類される点から設けられた。研究 2 から、実際の占いの利用を考えた場合には後者のスタイルが本来の「的中」に近いと考えられる。

4)日数(時間)を独立変数、ネガティブ記述に関する「占いの的中」の累積割合を角変換したものを従属変数として、線形、二次曲線、及び対数曲線への当てはまりを推定したところ、二次曲線が最もあてはまりは良かった($R^2 = .97$)。ただし、線形($R^2 = .95$)、対数($R^2 = .96$)も値は高かった。的中数はのべ数をカウントしているため、曲線的に増加するかどうかは結論は付けられず、ここではデータを提示するだけにとどめる。

5)ただし、占いを読んでから該当する事象を想起し「的中した」と感じたもの(Table1 の B)については、後智恵バイアス(hindsight bias)の可能性はある。

6)のべ 99 事例のうち、ニュートラルな内容を除いた 81 事例については、ネガティブな内容の方がポジティブな内容よりも「的中する」という予期は高かった(ネガティブ: 4.55 vs ポジティブ: 3.69)。また、実際に「的中した」と記録された記述をみても、ネガティブな内容では、事象が生じた後で占いを見ずに想起したというスタイル(Table1 の A)が 13 事例中、8 事例に対して、ポジティブな内容については 8 事例中、3 事例(しかもその 3 事例はもとより生起するという予測が低かったもの)と割合に違いがみられた。この結果からはネガティブな内容の「予感的中」が多いとも考えられるが、少数事例から導いた結果のため、ここでは註にとどめた。

Fortune-telling, recollector or recollected? :

Research of fortune-telling coming true judgment by using a diary method

Koshi MURAKAMI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

From a past experiment result, negative contents were judged “come true” than positive contents about fortune telling. In order to search for the factor to explain this result in detail, a diary method was used and examined. Study 1, fortune-telling sentences were distributed, and occurred events and the contents judged as “come true” were recorded. There were many positive occurred events, but the contents that were judged as “come true” were negative. Moreover, On judging the content to have “come true”, the recollection style of the content (Are these contents recollected without seeing fortune telling or with the fortune telling?). Excluding the influence of the belief, former style affects “come true” judgement. Therefore, In Study 2, the fortune-telling media that participants had contacts within a certain period were recorded, and the importance of style of fortune-telling use and voluntary recollection were examined.

Keywords: astrology, “come true” of premonition, diary method, recall of events